

法政大学国際高等学校

～ S G H事例発表～

19年6月28日

於：筑波大学東京キャンパス文京校舎

発表者：阿部高裕（法政大学国際高等学校教諭・S G H担当）

mail: t-abe@hosei-gh.ed.jp

持続可能な社会の実現を担う

グローバル・リーダー育成プログラム（GLP）

【構想の概要】

持続可能な社会の構築のために、世界が抱える課題を「多文化共生」「グローバルキャリア」「エンバイロメンタル・スタディーズ」の3領域に分け、①社会に参加するプログラム「PASS」、②学術的探究プログラムである「専門講座」の2つのアプローチから探究し、課題解決方法を提言する。

【今日の発表に関して】

- 本日の事例報告では、全生徒が3年間取り組んでいる自主的な課題探究活動「PASS」（The Program “Your Awareness Saves the Society”）に焦点を当てる。
- 三年間の大まかな流れ、教員のバックアップ態勢、特徴的な取り組みなどを紹介する。

PASSとは？

- 社会課題の解決に向けたプランを生徒（3～5名程度のグループ）が立案し、そのプランを具体的なアクションへと移行させるプログラム。
- 全生徒が3年間取り組む。「総合的な学習の時間」のうち年間15時間程度を確保している（ただし、生徒はその時間外にも活動している）。
- 生徒自身が計画したプランを、地域や企業に働きかけること（アクション）を通じて、挑む力、表現する力を養っていく。自分たちのアクションを振り返って発展した課題を設定しながら、活動を持続させる。

PASSの大まかな流れ／具体例（その1）

【1年次】 課題設定、アクション、プレゼンテーション

【2年次】 再設定された課題の探究、（アクション）、プレゼンテーション

生徒の課題研究の具体例→課題研究タイトル「*Work-Life balance in Japan*」

【1年次】

「ワーク・ライフ・バランス」という社会課題を設定（1年生1学期）。学校に近い地域にある百貨店と生徒自身が交渉。職場の「働きやすさ」について、女性社員50名にアンケートを実施（アクション）。「アクション」は1年次の夏休み～秋に取り組む。11月頃に1年生全生徒がこれまでの研究成果を発表。

【2年次】

1年次のプレゼンを通じて得られた教員・他生徒からのフィードバックなどを振り返り、今後深めていくべき方向性を再設定する。深まった考察の結果をパワーポイントでまとめ、11月頃に2年生全生徒がプレゼンテーションを実施。

PASSの大まかな流れ／具体例（その2）

【3年次】 個人発表（全生徒が発表をするポスターセッションを実施）。社会に向けた「提言」

生徒の課題研究の具体例→課題研究タイトル「*Work-Life balance in Japan*」

【3年次】

- 2年間の活動を個人が振り返り、7月頃に**3年生全生徒（250名超）がポスター発表。**
- 当該生徒は、2年間の発表を「ワーク」と「ライフ」のバランスを崩すのは「金銭（収入）」という問題であると指摘。また、「ワーク・ライフ・バランス」を現時点のように中性的な概念としているのは、問題解決に向けては不十分である。「出産」により着目すべきだと主張。
- 「ジェンダー」の視点を導入しながら「ワーク・ライフ・バランス」を再定義化すべきであるという「提言」。

外部の方をお招きしたSGH中間発表会（成果報告会）の様子

1月：1、2年生の優秀チームによる「SGH中間発表会」
（学年全生徒が発表／参加するプレゼン大会を通じて優秀チームが選抜される。）

9月：3年生優秀生徒による「成果報告会」
（3年生全生徒が発表／参加するポスター大会において優秀者が選抜される。）



教員の指導態勢の構築に関して

1 学年あたり50～70程度の課題研究がある場合、どのような指導態勢がとれるか？

○「総合的な学習の時間」に課題研究の時間を割くのであれば、学年担任が軸になるだろう。



○しかし、担任のみが指導にあたるのだとすると、教員一人あたりが担う負担が大きくなる。

⇒とにかく指導にあたる教員の「数」が欲しい。

○担任のみが指導にあたるのだとすると、教員の専門性（教科教育）の力がうまく活かしにくい。

⇒できるだけ専門性が活かせる指導体制としたい。

本校が導入しているクラスター制度

- 1年目は学級単位でHRを実施している（1学級あたり45名）が、2、3年目の生徒は混合で25名程度のクラスターを組んでHRを持っている（2年次以降は単位制であるため、HRクラスと授業クラスのメンバーは一致しない）。
- 今年度、クラスター数は21。各クラスターには教員がアドバイザーとして生徒につくが、いわゆる「生徒指導」は、「生徒支援部」、「進路支援室」、「国際化推進室」などの専門部署が主軸となって担う。



⇒部署の機能集団性を強化。⇒アドバイザーは「連絡係」的な位置付け。
⇒担任業務の軽減。生徒が担任に依存せず、自分から動く仕組みに。

クラスター制による指導態勢のメリット

担任制を軸にした課題研究指導	クラスター制を軸にした課題研究指導
指導にあたる教員が、学年のHR数に規定されてしまう（本校だと7名）	指導にあたる教員を多く配置できるようになっている（今年度は学年あたり11名）
教員の専門性を活かすのが難しい。	教員の専門性を活かすことが、担任制と比較してより可能に（今年度は生徒を対象に事前に希望調査を行った）。

PASSにおける 昨年の生徒の活躍（主なもの）

【受賞】

「スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会2018（SGH甲子園）」ポスタープレゼンテーション部門において「優秀賞（英語）」受賞。（18年3月）

【高大連携（管理機関の支援）】

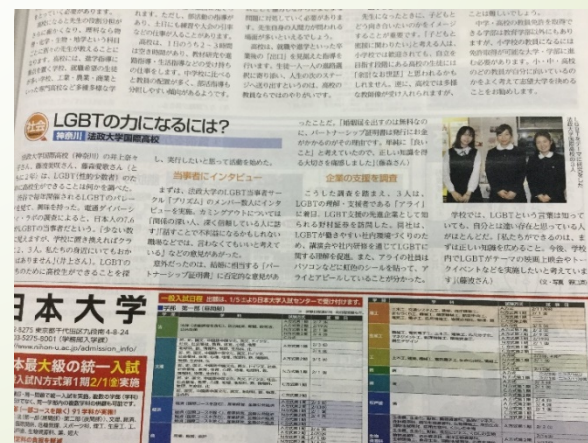
法政大学江戸東京センターが主催した研究会「法政大学生・附属校生の江戸東京チャレンジ」にて、生徒二組が研究発表（19年3月）

※そのほか、管理機関は「英語プレゼンテーション大会」を主催。

（他附属校生も参加）

【マスコミ取材】

『高校生新聞』第262号（12月10日～1月19日号）に「LGBTの力になるには？ 法政大学国際高校」という記事が掲載（18年12月）。





ご清聴ありがとうございました。

阿部高裕（法政大学国際高等学校教諭・SGH担当）

mail: t-abe@hosei-gh.ed.jp